愛知工業大学研究報告
第21号A　　昭和61年

トーマス・マンにおけるモデルの問題

山　崎　章　甫

Über die Modelle in Thomas Manns Werken

Shoho YAMASAKI

トーマス・マンに『ファウスト博士誕生』という書物がある。これは「誕生」という言葉の示すとおり，トーマス・マンの代表作の一つである『ファウスト博士』の成立の由来をこまかく物語ったものである。トーマス・マンはこの『ファウスト博士誕生』のほかにも，自分の作品の成立の由来を記したエッセイをいくつか書いているが，この『ファウスト博士誕生』はそのうちもっとも長く，一冊の書物となっているだけでなく，自分の作品の成立を語るという域をこえて，それ自身がすでに一つのたいへん面白い文学作品になっている。

この作品についてはのちにたびたびふれることになるのであるが，ここではまず，そのなかにある怖ろしい一文を引用しておくことにしよう。「わたくしは，巨匠の妙技など知りもしないで，従って，安易な，愚鈍な生活を送っている凡庸な連中に対しては，偽りのない軽蔑の念を持っていることを白状するし，筆を取る人があまりにも多すぎるのだと思う。」（佐藤晃一訳，以下同様）

トーマス・マンは描写と叙事（物語）の妙手であって，私などは，トーマス・マンの作品を読みながら，あまりのうまさに，しばし手をこまねいて長嘆息することがしばしばであるので，トーマス・マンのいう「巨匠の妙技」は多少理解しているつもりであるが，「安易な，愚鈍な生活を送っている凡庸な連中」といわれると，これには答えるすべはない。「気楽な日を過ごしたのは，私の生涯のなかで七日とはなかっただろう」といったゲーテと同じく，たえまない緊張と努力のうちに生涯を過ごしたトーマス・マンの眼から見れば，私などは「安易な，愚鈍な生活を送っている凡庸な人間」にほかならないからである。

また，「筆を取る人があまりにも多すぎるのだと思う」という場合の，この「筆をとる人」は，引用文の前後の関係からして，文学作品に筆をとる人のことをいっているのは明らかであるが，文学作品にこそ筆はとらないものの，私自身筆をとる人のはしくれであり，現にこうして筆をとっているのであるから，トーマス・マンに「筆をとる人があまりにも多すぎるのだと思う」ときめつけられると，手がすくみ，一歩も前進できなくなってしまう。

また，トーマス・マンには，原文で十四ページ足らずの「ビルゼと私」というこれまたたいへん面白いエッセーがある。これは作品中の人物とそのモデルとの関係を論じたものであるが，新潮社版トーマス・マン全集の森川俊夫氏の「解題」によると，「一九〇五年，小説『小兵営』Eine kleine Garnison の作者フリッツ・オスヴァルト・ビルゼ中尉が，軍の名誉を傷つけたとして起訴されたが，原告側弁護士エンリーコ・フォン・ブロッケンは，マンの『ブデンブローク家の人々』を，文学的には全く無価値のビルゼの小説と同列に置いて論じた。/本編は，これをきっかけとして書かれたもので……」ということになる。

私は「小兵営」という作品は目にしたこともないが，トーマス・マンが「ビルゼと私」のなかでこの作品について述べている語り口からだけでも，この作品がトーマス・マンの目に，唾棄すべき，文学的に「全く無価値」なものと思えていたことは明らかである。そしてこの作品が，トーマス・マンのノーベル賞受賞対象作品であり，また，トーマス・マンが「わたくしの全作品のうちで，後世に残ることに決まっているものは，この処女作の長編小説かも知れない。恐らく，この作品によってわたくしの『天から与えられた使命』が成就されたわけで，その後の長い生活をどうにかこうにか価値のある面白いものにしてゆくということは，おまけにすぎなかったのかも知れないのだ」（『ファウスト博士誕生』）とまでいっている『ブデンブローク家の人々』と並び称されるのは，トーマス・マンにとってはなはだしく心外なことであったのは当然である。

『小兵営』は見たこともないのであるから確かなことはいえないが，低俗な，いわゆるモデル小説であったの

であろう。一方，『ブデンブローク家の人々』は，リューベックの豪商マン家の四代にわたる盛衰を頭において描かれたものであり，舞台は主としてリューベックになっている。したがって『ブデンブローク家の人々』のなかには，トーマス・マンが面影をかりたリューベック在住の人々が数多く登場し，その結果，当時のリューベック市民のあいだで，モデル問題がやかましく論議され，トーマス・マン自身長年にわたってこの問題で悩まれたのである。

そこで，トーマス・マンは『ビルゼと私』のなかで「『ブデンブローク家の人々』を書きはじめたとき，私はローマのトルレ・アルジェンティーナ通り三十四番地の四階に居を構えていた。信じてもらっていいのだが，私は生都の存在をあまり確信していなかった。生都はその住民とともに，私にとって，夢よりもはるかに実際的というわけではなく，滑稽であり尊敬すべきもの，以前，私自身が夢みたもの，極めて独特なふうに私のものであるものであった。三年間私は，苦労しながら誠実にこの本を書いた。そして，この本がリューベックでセンセーションをまきおこし，人々の憤激を誘っていると聞いたとき，私は非常に驚いた。今日の現実のリューベックが，三年間の労作で組み立てられた私の作品と何の関係があったのか。馬鹿げたことだ……。私があるものからある文章を作ってしまったあと――そのものと文章との間にまだどんな関係があるというのか。俗物の考え方だ……」（佐藤晃一訳，以下同様）と書いている。

モデルと文学作品との関係を述べてあますところがない。さらに加えていえば，「一つ確かなことは，詩人が芸術的顧慮だけに導かれて，相識の実在の知人を描写している本のすべてに，ビルゼ中尉の名をつけようとすれば，大量の世界文学作品をこの名の下に集めなければなるまいということだが，そのなかには不巧の名作もあるわけだ。私には，ここに引きずり出してくることができそうな例を並べる余地がない。引きずり出すとすれば，文学史をそっくり引用しなければなるまい」ということになるのである。さらにまたトーマス・マンは「有情化（これは分りにくい訳語であるが原語はBeseelungである。）……これこそ美しい言葉だ。詩人をつくるのは，案出（これもわかりにくいが原語はErfindung）の才能ではなく，――有情化の才能である」とも書いている。

トーマス・マンの作中人物とこれらの人物のモデルとおぼしい者との対比については，一冊の書物が書けるほどだといわれているが，こういう問題をどれほど詳細に調べあげたところで，文学的になにか価値があるわけではない。トーマス・マンの作中人物とそのモデルと考えられる人物との関係については，トーマス・マン夫人，カーチャ・マンが『夫トーマス・マン』という書物のなかで，面白いまた啓示的な話をいくつか述べている。例えばアルトゥール・ホリッチャーという人物がいて，トーマス・マン家を訪れての帰り，ふとふり返るとトーマス・マンがオペラグラスで自分を観察していたという話を書いた。この話はのちにトーマス・マンの一面を語るエピソードとして広く知られるようになったが，カーチャ・マンは「たしかに，『トリスタン』のデートレフ・シュピネルの外貌のモデルとしてトーマス・マンの念頭にあったのは，ホリッチャーにちがいありませんが，しかし，かれは，バルコニーに立ってオペラグラスでホリチャーの後姿を観察したことなどは絶対にありません。第一，そんなことをする必要はぜんぜんありませんでした」（『カーチャ・マン　夫トーマス・マンの思い出』山口知三氏の訳文による。以下同様）と書き，『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』のなかに出てくる老クルル一家の場合，そのモデルについてたずねられた時トーマス・マンが「そうですねえ，ライン河の船のうえで半時間ほど眺めていたことのある人達ですよ」と答えたとか，『魔の山』に出てくるナフタについて，かつてマン夫妻がヴィーンに滞在していた時二人を訪ねて，一時間のあいだ一方的に喋りまくって帰っていったルカーチュがそのモデルではないかとカーチャ・マンが尋ねたのにたいして，トーマス・マンが「そんな意図はぜんぜんなかったんだがね。でも，言われてみればルカーチュのことが頭のどこかにあったのかもしれないな」と答えたなどの例をあげて，「かれ（トーマス・マン――筆者）は，あとで小説に利用するために，ひとを仔細に観察しておくなどということはありませんでした。あるときだれかに会い，その人のことが記憶の片隅にのこる。小説を書いているうちに，たまたまその人にぴったりの登場人物がでてくる。そこで記憶の片隅にねむっていた人の出番となる。というわけです」と述べている。これはおそらくカーチャ・マンのいう通りであったのであろう。しかしこれを裏返していえば，その時々のトーマス・マンの観察力がいかに鋭いものであったかを示す話でもあろう。トーマス・マンの観察眼の鋭さと，それを再現する表現力の適確さをもっともよく示しているものは，『魔の山』におけるメネール・ペーペルコルンと，そのモデルとして広く知られているゲーアハルト・ハウプトマンとの関係であろう。『魔の山』の主人公ハンス・カストルプの恋人，ハンス・カストルプがようやくにして一夜をともにした恋人マダム・ショーシャと連れだってダヴォースに帰ってくるあの「堂々たる中途半端」，「意味深重な無意味」（いずれも『ファウスト博士誕生』より）の富商メネール・ペーペルコルンと作家ゲーアハルト・ハウプトマンに共通する

ものは，その外貌と話しぶりのみであるが，しかしその見事な類似ぶりは,「ハウプトマンの奥さんのマルガレーテも，後年わたし（カーチャ・マン――筆者）に，あの人物はまちがいなくゲーアハルトの最もすばらしい記念碑です」といったほどのものである。『ファウスト博士誕生』に描かれているハウプトマンは，いわゆる「有情化」された作中人物ではなく，現実のハウプトマンであるが，これと『魔の山』におけるメネール・ペーペルコルンとを較べてみれば，トーマス・マンの観察眼と造形力とがどれほどのものであったかがよく分るであろう。『ファウスト博士誕生』ではハウプトマンはつぎのように描かれている。

「彼がその古稀の祝いのために（この祝いは延びて幾週間にもわたったが）ミュンヘンに来ていたときのこと，……わたくしたちはホテル・コンティネンタルで彼とシャンパンつきの軽食を共にしたことがある。それは彼の好きな酒盛りに発展していって，一時半から六時まで続いた。彼は，いつものように堂々たる構えで，意味深重な無意味とでもいう格好であった。何か言おうとして例の呪縛的な身振り手振りをはじめても，突然それを中止して，『いや，諸君，むしろこの無邪気なものをもうすこし飲みましょう』ということに決めてしまうのであった。その『無邪気なもの』とはモエト・シャンドンだったのである。したたかに酔っぱらった彼は，遂に，階上の自室へ昇っていって，横になるが早いか，その瞬間に眠りこんでしまった。――実際の話，彼をベッドへ連れていった者がまだ扉を閉めきらないうちに，眠りこんでしまったのである。」

「わたくしたちの交際の最も独的に滑稽だった瞬間は，彼がわたくしに君という親しい呼びかけをしようとして――やはりそれを中止してしまったときであった。彼はいくらか飲んでいたらしかったのだが，こう言いはじめたのである。『つまりですね……。よくお聞きくださいよ……。よろしい……。わたくしたちはもう兄弟じゃありませんか，ねえ……。ですから，わたくしたちは当然しなければ……。確かに……。しかし，やめましょう。』そこで，『あなた』という敬称から離れないままになった。」

これは『魔の山』のメネール・ペーペルコルンそのものではないか。しかし『魔の山』のペーペルコルンは外貌と口振りこそハウプトマンに似てはいるものの，すでにハウプトマンを遠くはなれて，世界文学史上稀有の生き生きとした独自な文学形象となりえているのである。すなわち，そこではもはやモデル問題なぞ云々することのできぬ域にぬけでているのである。トーマス・マンは「彼（ハウプトマン――筆者）を讃歎する自分の気持のなかにかすかな皮肉がまざっていたことを否定しはしない」と書き，また「わたくしが『魔の山』のなかで敢えて『人格』（トーマス・マンは日頃ハウプトマンのことをPersönlichkeit と呼びならわしていた――筆者）を揶揄して，彼の姿にかたどった堂々たる中途半端というものの象徴を描き出した」と書いている。そして実際『魔の山』のペーペルコルン像は，多少とも『揶揄的』なものであると同時に，トーマス・マンのハウプトマンにたいする「皮肉」な気持をも反映している。しかしこれは前にも述べた如く，すでにハウプトマンとはまったく関係のない一個の文学像にたいしてのものであり，このことを明確に理解していたハウプトマンは，トーマス・マンのメネール・ペーペルコルンの扱い方を「寛仁大度に見のがし」トーマス・マンの「仕業をむくつけに彼に知らせ」,「彼の怒りを挑発してやろうとする一切の金棒引きを相手にしなかった」ばかりでなく,「調子の高い文章で」この小説の感想を書き，さらには，一九二九年におけるトーマス・マンのノーベル賞受賞に力をつくすのである。これらの話はヒトラーに屈服した悲惨な晩年とは対比的な，王者の如き栄光のうちにあった当時の，大作家ハウプトマンの面目を伝えるに足る一面である。

トーマス・マンの作品におけるモデルと作中人物との関係の概略は以上の如くであるが，ここに，トーマス・マンの全作品中唯一の例外的な人物がいる。すなわち，『ファウスト博士』におけるクラリッサ・ロッデである。ロッデの悲劇はつぎのように書き始められる。

「ここにとりあげるのは，世間からはほとんど注目されなかった一人の親しい人間の破局であるが，そうなるまでには男の破廉恥，女の弱さ，女の誇り，職業上の失敗など，さまざまなことが重なったのである。同じく明らかに危険にさらされていたイーネスの妹，女優クラリッサ・ロッデが，ほとんど私の眼前で破滅してから今は二十二年たっている。一九二一年から二十二年にわたる冬のシーズンが終った五月に，彼女はプァイフェリングの母の家で，母のことなどあまり考えもせずに，性急に，また断乎として，毒で命を絶ったのである。彼女は，自分の誇りがもはや生きつづけることに耐えられなくなる瞬間のためを考えて，前々からこれを用意しておいたのである。」

このクラリッサ・ロッデの死は，これにつづくイーネス・ロッデの破滅，シュヴェールトフェーガーの死，ネポムク（エヒョー）の死とたたみかけて，最後の，主人公アードリアン・レーヴァーキーンの破滅へとなだれ落ちてゆく悲劇の始まりである。

前に，このクラリッサ・ロッデが，トーマス・マンの作品のなかでのモデルと作中人物との関係の唯一の例外と書いたが，それは，他の作中人物にモデルがある場合

でも，そのモデルはたんに風貌が用いられているだけであって，作中人物の思想も行動もすべてそのモデルとはなんの関係もない，トーマス・マンの創作であったのに反して，このクラリッサ・ロッデは，その風貌，考え方，行動のはしばしに至るまで，トーマス・マンの次妹，カルラ・マンに生き写しであるからである。クラリッサ・ロッデの場合は，すでにモデルと作中人物という域をこえて，実在の人物カルラ・マンの悲劇がそのまま小説『ファウスト博士』のなかにとりいれられているといっても差支えないほどであるからである。

トーマス・マンは五人兄弟であった。上から，ハインリヒ・マン，トーマス・マン，ユーリア・マン，カルラ・マン，ヴィクトル・マンの五人である。そしてこの末弟のヴィクトル・マンが『われわれは五人であった』というたいへん面白い自伝を書いている。これは自伝であるが，著者がマン兄弟の末弟であるから，当然それはマン家の物語になっており，すぐ上の姉カルラ・マンについても詳細な記述がある。このヴィクトル・マンの書いているカルラ・マンと『ファウスト博士』におけるクラリッサ・ロッデとを読みくらべてみるならば，この二人がまったくの生き写しであることを疑う者はまずあるまい。違いといえば，小説上の結構からくるものを無視すれば，弟であるヴィクトル・マンが，姉の死の原因を遠慮がちに，筆を柔らげて書いているところを，トーマス・マンが，その作家的慧眼の見抜いたままを容赦なく書き記しているだけのことである。

この間の事情についてはトーマス・マン自身が，『ファウスト博士誕生』のなかで「六月（一九四六年――筆者）の半ばにならないうちに，第三十五章の，気の毒なクラリッサの運命を，体験通りに，と言うのは，わたしの妹の身に起った事実に基づいて自由に書きはじめたが……」と書いている。「自由に」と限定されてはいるが，クラリッサが文学作品中の一人物である以上，その構成，叙述が「自由」であるのは当然のことであって，上の引用文の重点が，「体験通りに」，あるいは「事実に基づいて」にあることはいうまでもない。前にも述べたように，モデルと作中人物とのこのような関係は，トーマス・マンの全作品中これが唯一のものであるが，彼が実の妹の悲劇を作中人物のうえにありのままに再現することを敢えてしたのは，この作品，『ファウスト博士』にたいする彼の取り組み方，とらえ方に由来しているということができるであろう。トーマス・マンがこの作品をどのようなものと考えていたかについての発言は，これまた『ファウスト博士誕生』のなかに数多く見ることができる。それらは例えばつぎのごとくである。

「一つの生涯の全体を素材として取り入れた創作，一つの生涯の全体を，半ばは心ならずも，半ばは意識的に努力して，綜合し，集中統一しているもの……」この作品の「自傳的雰囲気」「わたしがこの企て（『ファウスト博士』を書こうという企て――筆者）を前にして尻込みをするのは，これまでずっとこの企てを自分の最後のものと見なしてきたからなのだ……」「この終末の小説……」「不気味な構想の基礎になっている一切の直接的なもの，個人的なもの，告白的なもの……」「秘密の作品で生涯の懺悔だというこの作品」「現実やら自分の生涯の秘密やらを挿入しようという覚悟……」「徹頭徹尾告白であり生涯を犠牲にするものであって，一切の顧慮を知らない，というような作品……」「『ファウスト博士』には，わたくしの生活感情が何としこたまに含まれていることだろうか。結局のところ，これは一つの過激な告白である。」「この作品を遺言と見なすわたくしのひそかな考え方……」「……それにしても，生涯の秘密をこめたこの作品が公表されて，多数の本のなかの一冊として世界じゅうどこにでも存在するようになるという考えは，相変らずわたくしの心の底では縁遠い，摑みにくいものだったのである。……」

このように「生涯の懺悔」であり「告白」であり，「一切の顧慮を知らない」ような作品，あるいはまた「遺言」とみなされ，執筆中はこの作品の公表さえ考えなかったというこの作品にあって，妹の悲劇が事実に即して，容赦なく作品のなかに書き写されたとしても，読者としてはなんら不思議とするにあたらないのである。

しかしだからといって，クラリッサ・ロッデが『ファウスト博士』のなかで，前出の『小兵営』ふうのモデル小説的モデルに堕しているのでないことは，こと改めて述べるにも値しない。クラリッサ・ロッデは「有情化」によって，『ファウスト博士』中の一人物として，渾然として作品に融けこんでいるのであって，トーマス・マンが，リューベック市民と『ブデンブローク家の人々』とについて述べた，前出の言葉，「私があるものからある文章を作ってしまったあと――そのものと文章との間にまだどんな関係があるというのか」は，このクラリッサ・ロッデについてもあてはまることは，これまたいうまでもないことである。

話は変るが，さきに長々と引用した，『ファウスト博士誕生』中の『ファウスト博士』に関する発言のなかの，「懺悔」とか「告白」という言葉は，トーマス・マン自身と関連して，どのように「懺悔」であり「告白」であったのかは，これまた重要な問題であるが，これは別の機会に改めて考えてみることにしたい。

（受理　昭和61年1月25日）